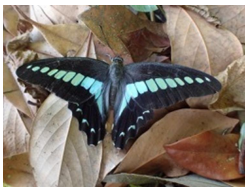
倉吉博物館　打吹山ウォッチングガイド（9 月中旬）

ともに南から

1. アオスジアゲハ

暑い夏のアゲハチョウです。幼虫の食草はクスノキとタブノキ、ヤブニッケイ、シロダモなどのクスノキ科の樹木の葉です。アオスジアゲハが多く利用しているのはクスノキとタブノキですが、打吹山にはクスノキの自生はなく、タブノキが中心になります。これらはいわゆる照葉樹で、暖帯の樹木です。したがってアオスジアゲハも暖帯のチョウであり、暖かい間は何世代も出現し、冬越しは蛹でしかできません。


成虫　雄

新葉に産卵

産卵は、柔らかい葉を選んで行われ、5月に成虫が羽化します。しかし、タブノキは4月には新葉を展開します。最初の産卵の頃には葉が硬くなってきます。タブノキは原則春だけに新葉を伸ばしますが、剪定をされると再度萌芽するため、ひこばえや小径木は春以外にも萌芽します。このような葉に対して産卵・摂食が行われますので、卵や幼虫を観察することは比較的容易いことです。新葉は赤いため遠くからでも発見でき、位置も低いからです。高い確率で産卵していますので、雌はこのような少ない萌芽を探しているものと思われます。クスノキは秋まで新葉をつけ続けますので暖帯ではクスノキを主な食草として、擬態もクスノキに合わせています。

葉表の終齢幼虫

葉裏の 1 齢幼虫

建物についた蛹

1齢幼虫は黒緑色で葉の裏に隠れていますが、3齢以降は緑色となり葉の表で静止しています。蛹も緑色で、模様もクスノキの葉脈に似せています。葉裏で蛹化するからです。擬態の意味がない場所で蛹化してくれたものは発見しやすくなります。

2. 秋に新芽

打吹山の樹木は春に萌芽します。落葉樹はその年の秋に、常緑樹は翌年以降に落葉します。越冬した休眠芽（冬芽）が春に一斉に萌芽し、伸長が止まったところで翌年用の休眠芽を形成します。休眠芽（No.14　春を待つ、No.24　温暖化は大敵参照）は、葉が変化した鱗片に包まれて冬を越すのですが、形成時期は種によって様々です。夏前には休眠芽を作っているものがほとんどだと思われます。

シロダモの 2 次萌芽

枝や幹を切断すると、頂芽の代替として葉腋の腋芽や組織内の潜伏芽が萌芽してくるのは普通ですが、一度伸びが止まってできた休眠芽が萌芽するものがあります。一斉ではなく、ポツリポツリと出現します。この現象をここでは2次萌芽とよぶことにします。どの樹種でも起きるものでしょうか。観察してみてください。

シラカシの
2 次萌芽

2次萌芽は常緑樹で多く見られ、稚樹や「ひこばえ」だけにみられる現象のようです。年中伸長を続ける熱帯の樹木の性質を残すのでしょうか。熱帯降雨林の樹木は、伐採後の萌芽力が小径木の方が強く、根のでんぷん貯蔵量の多いものが強いと報告されています。大木はでんぷん貯蔵の絶対量は多いものの、多くの根の維持に使われてしまって、新しい萌芽への資源の投資量が少なくなるからと説明されています。稚樹はこれで説明できるとして、「ひこばえ」はどう考えればよいのでしょうか。ぜひ考えてみてください。

（倉吉博物館専門委員　國本洸紀　2025）